

フロイトと吉本隆明における  
早期母子関係論の比較研究  
——小此木啓吾のエロスのコミュニケーション論  
を仲立ちとして——

今 村 知 晃



# フロイトと吉本隆明における 早期母子関係論の比較研究 ——小此木啓吾のエロスのコミュニケーション論 を仲立ちとして——

今 村 知 晃

## 目 次

第Ⅰ章 問題と目的	
第Ⅱ章 フロイトの早期母子関係論	
第1節 フロイトの胎児期論	
第2節 フロイトの乳児期論	
A 乳児の無力さ	
B 自体性愛, 依託	
第3節 フロイトの幼児期論	
A サディズム肛門期	
B フェルス期	
C フェルス期の終焉と, 潜伏期への移行	
D 去勢不安と原始群族	
第4節 誘惑者としての母親	
第5節 系統発生的基礎と偶有的体験	
第Ⅲ章 小此木啓吾の早期母子関係論	
第1節 一方交通と二面交通	
第2節 母性原理の世界と, フロイト以後の 精神分析の潮流	
第3節 エロスのコミュニケーション論の課題	
第Ⅳ章 吉本隆明の早期母子関係論	
第1節 胎児期の内コミュニケーション	
第2節 乳児期の内コミュニケーション	
第3節 内コミュニケーションとしての授乳	

第4節 音声の内コミュニケーション	
第5節 言語の発生	
第6節 出産の習俗	
第7節 日本の出産の習俗の共同体論的な背景	
第Ⅴ章 吉本と小此木およびフロイトの比較検討	
第1節 吉本と小此木との比較検討	
第2節 吉本とフロイトの比較検討	
第Ⅵ章 内コミュニケーションの精神病理論	
第Ⅶ章 内コミュニケーションの治療論	
第Ⅷ章 結論と課題	

## 第Ⅰ章 問題と目的

本研究は、吉本隆明の早期母子関係論および精神病理論を、精神分析学の創始者であるフロイトの母子関係論および精神病理論と比較し、その臨床への応用の可能性を探ることを目的とした文献研究である。吉本とフロイトを対比する上で、小此木啓吾のエロスのコミュニケーション論を二人の間を仲立ちするものとして参照している。

吉本隆明を取り上げる理由は四つある。

(一) 吉本は独自の共同体論と家族論を持っており、そのどちらも日本および日本人についての理解を深めてくれる。

(二) 吉本は独自の言語論を持っており、ここでは言語の系統発生および個体発生が起源から考察されている。これもまた、日本語の特性についての理解を与えてくれる。

(三) 吉本の「心的現象論」は、個体の「心的現象」の発生を胎児期から考えるという点で徹底している。

(四) 吉本は、その「心的現象論」の中で独自の精神病理論を展開している。

以上である。吉本の、日本(人)の特性を踏まえた心的現象論と精神病理論の検討は、日本の臨床心理学(的実践)にとって益するところが多いと思われる。

本研究では、吉本の早期母子関係論をフロイトおよび小此木啓吾の早期母子関係論と比較している。

フロイトと対比する理由としては、吉本の早期母子関係論自体がフロイトの発達論を参照し、それを修正する形で進められているという点が挙げられる。フロイトの発達論の検討自体が吉本理論の理解を深めると同時に、その差異を明らかにすることで吉本理論の特徴が鮮明になると考える。

本研究における小此木の位置付けは、フロイトの精神分析学およびフロイト以後の精神分析理論のわが国における受容者であるとともに、古沢平作が提唱した「阿閨世コンプレックス」理論の継承者でもあるというものだ。フロイト以後の東西の母子関係論の一つの集約として、小此木のエロスのコミュニケーション論を検討したい。それにより、フロイト以後の精神分析学および日本の精神分析学が持っている問題意識と吉本のそれとの間に共通点のあることが明らかになるとともに、吉本の早期母子関係論の独自性とその臨床心理学(的実践)への寄与の可能性も見やすくなると思う。

## 第Ⅱ章 フロイトの早期母子関係論

### 第1節 フロイトの胎児期論

発達心理学者のヴォークレールは、「長い間、

心理学者は、胎児が周囲の環境と頻繁に相互作用をしているとは思ってきませんでした。心理学者が胎児の感覚・運動の発達に強い関心を寄せるようになるには、エコー画像のような技術の進歩と、胎児や新生児に対する見方の変化を待たねばなりません」と述べている(Vauclair, 2004)。

フロイトも、「胎児が周囲の環境と頻繁に相互作用をしている」とは考えなかった。フロイトの胎児期論の特徴は、「胎児の(母体を含む)環境への無関心」というところにある。

フロイトは、胎児の精神の状態と、眠りにおける精神状態とは、著しい近接性を持つものだと見なしている。睡眠とは、「自我が外界とのかかわりを中断し、感覚器官から備給を引き上げる」ことだ(Freud, 1940)。これは、「ほとんど完全な環境世界からの撤退と、環境世界へのすべての関心の停止」と言い換えることもできる(Freud, 1917a)。フロイトは、「環境世界へのすべての関心の停止」の状態である睡眠を、「子宮内生活」への「回帰」として見なした。このことは、フロイトが胎児の精神状態を、眠りと近似的な、環境に対する無「関心」の状態にあると考えていることを示している。そしてこれは、フロイトが環境(外界)に対する「関心」の起源をどこに設定したかを追ってみれば、よりはっきりと理解することができる。

環境(あるいは外的現実)に対する「関心」はなぜ生じるのか。フロイトはその契機を、「内的な欲求から来る命令的な要求」による心的状態の「攪乱」という事態に見出している(Freud, 1911)。これは「生の困窮」とも呼ばれ、例えば「空腹」がそれにあたる(Freud, 1900)。このような「攪乱」は出生以後に生じるものであり、出生前の「子宮内生活」における胎児は「心の安静状態」にあると見なされている。なぜならフロイトは、胎児期においては母親が「自分の体を新たにしつらえることによって胎児の欲求をすべて満たしている」と考えたからだ(Freud, 1926)。このような「安静状態」は、乳児期においては(「幻覚」および「内的変化」

を経た後に) 母親の「世話」によって回復, 維持される。「外界の現実」に対する「関心」が本格的に「発達」するのは, 「個体が寄る辺なく世話を受けるばかりの一時期を通り抜け」た後のこと(乳児期を過ぎて以後)であるとされる(Freud, 1915)。

このようにフロイトは, 環境(外的現実)に対する「関心」は「生の困窮」によって生じると考えた。そして, 「子宮内生活」においては「欲求」が母親の身体によって「すべて満た」されているがゆえに, 胎児は母体(環境)に対して無「関心」である。そしてこの無「関心」は, “「子宮内生活」における無「対象」”の根拠となる。フロイトは, 「どこまでもナルシ的な存在である胎児にとって, 母親は対象としては全く未知」である, と述べている(Freud, 1926)。フロイトは, 母体としての母親を, 欲求を満たすがゆえに対象として存在しない(「関心」の, あるいは「感覚」の対象となりえない)という(逆説的)存在として想定している。この逆説性は, フロイトが, 「子宮内生活」が胎児にとって「安静状態」であり, 胎児が眠りと近似した状態にあることを疑わなかったことによって成立している。

現在のな知見から言えば, 母体内の胎児が必ずしも「安静状態」にあるとは言えない。胎児期から感覚器官がはたらきはじめ, 「妊婦が不安を感じていると胎児の動きが激しくなる」ことも明らかになっている(Verny& Weintraub, 2002)。フロイトの言葉を用いるならば, 胎児の「心の安静状態」は母体の(心身の)状態によって「攪乱」されていると想定される。このことは, 現在のな胎児期論からのフロイト理論の再検討が必要であることを示しており, 本研究はその一環をなしている。

## 第2節 フロイトの乳児期論

### A 乳児の無力さ

胎児期から, 出生を経て乳児期となる。フロイトが乳児について強調していることは, 乳児の「無力」さ(あるいは「寄る辺なさ」)であ

る(Freud, 1895)。

乳児は外的現実に対して「無力」であり, 同時に自らの欲求(欲動)に対して「無力」である。フロイトはその出生論のなかで, 自らの「欲動要求」の高まりに対する「無力」さ(「寄る辺なさ」)の体験は, (「現実的危険」に対する「寄る辺なさ」)の体験と同様に「外傷的体験」であるという考えを示した。子の養育者(母およびその代理)は, 「現実的危険」から乳児を保護すると同時に, 乳児の欲求を満たすことで「欲動危険」からも乳児を保護することになる。フロイトは, このような「人間の幼児の寄る辺なさ」と依存性(が「長引く」こと)が, 「道徳的動機」や「愛されたいという欲求」の「源泉」であると考えるとともに, 人間(だけ)が神経症になるということの「生物学的要因」であるとみなした。この「寄る辺なさ」と依存性により, 子にとって母は「巨大な価値を持つ対象」として存在することになる(Freud, 1926)。

### B 自体性愛, 依託

出生と同時に新生児はさまざまな「身体的な欲求」によって攪乱される。出生時におけるその代表は呼吸へと向かう欲求(「息苦しさ」)であり, それは「内的変化」が産声として生じ(その後呼吸が持続)ることで解消された(Freud, 1895, 1917b)。もちろん「欲求」はそれだけではない。フロイトは「空腹」を例に挙げている(Freud, 1900)。「空腹」状態にある新生児はまず, 「内的変化」を通して「身体的な欲求」を放散する。「それでも状況に変化はない。」この泣き叫びに応じて母親(あるいはその代理)が授乳することによって, ようやく「空腹」は満たされ「欲求」は(一時的に)解消する。母親はその時, “「内的な刺激を終息させる満足体験」の構成要素として「出現」する「一定の知覚」像”として新生児のうちに「記憶」される。このいちばん初めの“母の像”は, あくまで哺乳時の知覚像としての“母の像”であり, 新生児の空腹を満たす(母親の側の)器官である“乳房”である。フロイトは新生児(お

よび乳児) にとっての主要な欲求は、この「栄養受給」の欲求であると考えた。したがって、新生児(および乳児) にとっての主要な“母の像”は、授乳の器官としての「乳房」として表象される。ここでは、胎児の無「関心」から、乳児における「乳房」への「関心」という転換(移行)が生じている。

ここまで、新生児の持つ内的な欲求(の代表的なもの)として、呼吸と空腹を取り上げてきた。フロイトの特質(卓見)は、新生児は(これらの欲求に加えて)「性欲のさまざまな蠢きの萌芽をすでに携えて」いると考えた点にあらわれている(Freud, 1905)。そしてこのような「性欲」の「蠢き」(の一部)もまた、「乳房」によって満たされることになる。

哺乳においては、食べることの欲求と「性欲動」が同時に満たされる。フロイトはこれを(「生命維持活動」のうちに「性的活動」が含まれているという意味で)「依托」と呼んだ。ここでは「食べ物の欲求」の満足が主で、「性欲動」の満足はそれに随伴するものである。哺乳において満たされる「性欲動」は、主に(哺乳の器官である)「口唇」領域を「性源域」(性感帯)とするものであり、フロイトはこのような、器官に対応する欲動のことを「部分欲動」と呼んでいる。このとき最初の「性対象」は、哺乳の器官としての口唇領域(およびそこから生じる性欲動)に対応するかたちで、授乳の器官としての「乳房」としてあらわれる。これは、「部分欲動」に対応した「部分的な「性対象」である。乳児の性的な「部分欲動」は、「口唇」領域に関するものに限定されるわけではない。ただ、口唇領域以外を性源域とする性欲動は、基本的には「自体性愛」的であり、(部分的な)対象としての母親と結び付いてはいないと(一応は)考えられる。あるいは、他の性欲動も部分的な対象(としての母)と、「依托」をとおして結び付くこともあるのかもしれないが、その場合でも、乳児にとって「母の乳房を吸引する行為」が「人生最大の重要事」であるため、「乳房」という(部分的な)対象がこの時期に

において「最大の」価値を持つ対象であることにはかわりがない。

フロイトの性理論で特徴的なことは、「性欲動」の満足は起源においては対象の存在を必要としていなかった、とフロイトが考えている点である(Freud, 1915)。「性欲動」が対象と結び付くのは、「自我保存欲動」(ここでは食べ物への欲求)が自力では満たされないからであり、「自我保存欲動」を満たしてくれる対象が同時に(それに「依托」されたかたちで)「性欲動」も満たすという経験が、「性欲動」とその対象とを結び付けると見なされている。フロイトは、「性欲動」が対象によってではなく、「自分自身において」満たされる状態を「自体性愛」と呼んだ。「性欲動」は元来「自体性愛的」であり、「依托」を通して対象と結び付いた後でも、容易に(あるいは必然的に)「自体性愛」に還っていく。口唇領域に生じる「性欲動」もその例外ではなく、「依托」的な満足と並行するかたちで、「自体性愛的」な活動が「おしゃぶり」としてあらわれてくる(Freud, 1905)。

フロイトが、乳児期において乳児が母親に部分的な関心しか示さないと考えた根拠は、この「自体性愛」、およびその「生命維持活動」への「依托」という想定にある。人間の性は、その個体発生的な起源においては対象を必要としない(言い換えれば、無対象な)自体性愛的なものであり、この自体性愛は「生命維持」に限定される範囲でだけ、部分的に対象と結び付くことになる。性というものの個体発生的な起源を、二者の間関係ではなく、個体的な過程としての自体性愛に置くフロイトのこの発想は、性を身体的な過程として考えることを前提として成立していると考えられる。(これについてはのちに論じる。)

この自体性愛は、乳児期および口唇領域に限定されるものではない。乳児期を過ぎたのちも、主要な器官を移しながらさまざまなかたちであらわれる。

### 第3節 フロイトの幼児期論

#### A サディズム肛門期

フロイトは、乳児期から幼児期にかけての「性的編成の発達段階」として、三つの「性的編成」を設定した。一つ目は、これまで述べてきたような、「口唇」領域に主要な性源域が置かれている段階であり、これは「口唇的編成の段階」と呼ばれている。あとの二つはそれぞれ「サディズム肛門的な編成の段階」、「ファルスの編成段階」と呼ばれるもので、前者は「腸粘膜」が、後者は「男性器」（女兒においては「クリトリス」）が主要な性源域となる（Freud, 1905, 1917b）。

フロイトは、「口唇的編成段階」（の終わり）における（部分対象としての）「乳房」の喪失について、それが生じるのは、「その子が自分に満足を惜しみなく与えてくれている乳房という器官をもっているその人物の全体表象をつくり上げることができるようになった時分」であると述べている（Freud, 1905）。「性欲動」はその後「自体性愛的となる」（おしゃぶり、あるいはサディズム肛門期へと移行する）と同時に、「全体表象」としての母親との関係も登場してくることになる。

サディズム肛門期は、主として「制圧欲動」と「肛門欲動」の二つの欲動によって構成される。「制圧欲動」は、例えば「動物や遊び友だち」に対する「特別な残忍さ」としてあらわれる。一方「肛門欲動」は、便の排泄に「依託」されたかたちで性的な快を獲得する。フロイトははじめ、「制圧欲動」を「はじめから対象を有し確保している」欲動であると考えていたが、後年「一次マゾヒズム」という概念を提唱し、一次的には自体に向かうもの（死の衝動）であるという修正を加えている（Freud, 1917b）。一方「肛門欲動」は、「はじめから」自体性愛的な欲動である。また、排便の際の快を高めるための「排便を押しとどめる行為」は、「制圧欲動」と「肛門欲動」が二つながら肛門領域をめぐって作用していると見なすことができる。

この「肛門欲動」は、「はじめから」自体性

愛的な欲動でありながら、二次的に対象との関係における役割を獲得する。起源においては自体性愛的な欲動である「肛門欲動」が、（子の欲求を満たす存在であり、同時に、自由な排泄を阻む存在でもある）「自分を世話してくれる女性」（母親およびその代理）との関係のなかで、（全体表象としての）対象との結び付きを獲得していく。そして「糞便」が「贈りもの」としての価値を持つようになったり、「排便を拒むこと」が「反抗」の表現として成立したりする（Freud, 1905, 1933）。このようにして、自体性愛としての肛門欲動は、母と子の性的関係における二次的機能を獲得していく。

#### B ファルス期

幼児は、「二、三歳の頃から」ファルス期と呼ばれる性的な発達段階に入る（Freud, 1940）。フロイトは、「早期幼児期の性」はこのファルス期に「頂点に達」と考えた。ファルス期における主要な性源域は、男児においては「亀頭」（ペニス）、女兒においては「陰核」であり、両者とも「排尿に関連づけられている」（Freud, 1905）。これらの器官（特にペニス）は、口唇期、サディズム肛門期においても、部分欲動の性源域として排尿や清拭の際に快を産出していたと考えられる。フロイトが「二、三歳の頃から」ファルス期が始まると考えた根拠のひとつは、この時期に「ファルス」を用いた「マスターベーション」が活発になるからである。ファルス期の過程のなかで、男児と女兒の差異が（性的発達において）はじめてあらわれてくることになる。ただし、はじめから差異があらわれてくるわけではなく、男児と女兒の「一致」がまず「前面に出てくる」ことになる（Freud, 1933）。

この時期の「愛の対象」は男児、女兒ともに母親（あるいはその代理）であり、男児、女兒ともに「母親に赤ん坊を産ませたいという欲望、ならびに、そのいわば対としての、母親の赤ん坊を産みたいという欲望」を持っている、とされる。ここでの母親は、乳房の延長線上に位置づけられる、「全体表象」としての「母親」で

ある。ファルスを性源域とする自体性愛と母親を対象とする対象愛とが、自慰とそれに伴う（母親を対象とし、父親と同一化したかたちでの）「空想活動」として、重層的に存在することになる（Freud, 1940）。

男児においては、ペニスを性源域とした欲動が母親という対象に向かう。ここで父親が「ライヴァル」としてあらわれてくることにより、父-母-息子の三角関係が形成され、男児はエディプス状況に突入してゆく。

女兒も、ファルス期の初期においては（男児同様）「母親拘束」の状態にあり、この時期の父親は女兒にとっても「やっかいなライヴァルにすぎ」ないとされる。

男児と女兒の（性的発達における）差異は、「異性の性器を目にすること」をめぐる生じてくる。「異性の性器を目にすること」をとおして男性との性器の違いに気付き、「ペニス羨望」に陥った女兒は、自身だけでなく「母親」もまた「ペニス」を持たない存在であることを「発見するとともに、もはや母親を愛の対象として見るができなくなり、その結果、長い間蓄積されてきた敵意への動機が優勢になる」。そして、「子供-ペニスに対する欲望を父親に転移するとともに、女の子はエディプスコンプレクス状況に入り込」む、とされる。それにより、父親を愛の対象とし母親を「ライヴァル」とする、父-母-娘の三角関係が成立することになる（Freud, 1933）。

### C ファルス期の終焉と、潜伏期への移行

男児は、「自分の性器を手で弄ぶ」ことを禁ずるための「去勢の脅し」と、異性の性器を見ることという二つの契機を通して、「去勢コンプレクス」に至る。女兒もまた、異性の性器を見ることを通してそこに至る。男児は去勢コンプレクスあるいは去勢不安のもとでエディプスコンプレクスを「抑圧」し、それにより「潜伏期」に移行する（Freud, 1924）。女兒の場合は、去勢コンプレクスおよびペニス羨望のもとで、エディプス状況に移行していくことにな

る。女兒には、エディプスコンプレクスの「抑圧」をうながす去勢不安が「抜け落ちて」いるため、女兒（あるいは女性）は「長い間エディプスコンプレクスのうちにとどまりつづけ、後になってから、それも不完全な形でこれを崩壊させるにすぎ」ないとされる（Freud, 1933）。

### D 去勢不安と原始群族

男児における「エディプスコンプレクスの没落」においては、「去勢不安」が重要な役割を果たしている。「去勢不安」における“去勢する者”は父親であり、「去勢不安」は、言い換えれば、“息子の父に対する（攻撃性と）恐怖”を意味している。

現実の父親は、実際に子どもに去勢を行うわけではない。ではなぜ子どもには「去勢の罰」が信じられるのか。これには、（さきに挙げた）去勢の脅し、異性（女性）の性器を見ることという2つの契機とともに、系統発生的な増幅（強化）が関与しているとフロイトは考えた（Freud, 1926）。

「去勢不安」の系統発生的な基礎は、「太古の時代の人間の家族」における、父親による息子の去勢にある、とフロイトは述べている（Freud, 1933）。この「太古の時代の人間の家族」のあり方のことをフロイトは「原始群族」と呼んでいる。フロイトはこう言っている。「力の強い男性原人は、群族全体の主人であり、父であった。彼の力は無制約であって、彼はその力を暴力的に行使した。すべての女性原人は彼の所有物であり、自分の群族の妻たちも娘たちも、おそらくは他の群族から略奪されてきたであろう女性原人たちも、ことごとく彼の所有物であった。息子たちの運命はひどいものだった。彼らが父の嫉妬心を刺激してしまうと、彼らは打ち殺され、去勢され、あるいは追放された」（Freud, 1938）。この「原始群族」における父と息子の関係（父による、息子に対する、打ち殺し、去勢、追放）の繰り返しが、「系統発生的な素因」として、「去勢不安」の発生を「強化」というのがフロイトの考えであっ



た。このような“巨大な父の像”を始原の家族において想定することは、フロイトの家族論および共同体論の大きな特徴である。

#### 第4節 誘惑者としての母親

これまで見てきたように、胎児期から幼児期にかけて、母親（あるいはその代理）は子の欲求を満たす存在であり、乳児期においては乳房という部分的な対象として、幼児期においては全体的な母親という対象として、子の欲動の対象として存在している。その一方で母親は、（「口唇サディズム段階」以後においては、）子の欲求を（「完全には」）満たしえない、あるいは欲求の満足を阻害する存在として子の「非難」や「敵意」の対象でもある（Freud, 1933）。このような両価的な関係として「母親拘束」は成り立っている。

それとともにフロイトは、母親のことを、子の欲動の蠢きを“喚起”する存在であるとも考えている。例えば口唇領域においては、授乳を通して、食行為に依托されるかたちで口唇領域の性的な欲動が“喚起”されたと考えられる。

同様に性器領域に関しても、母親が乳幼児の「身体世話をする際に」性器を刺激することにより、性器領域の性的な欲動が喚起される（「目覚めさせ」られる）、と述べている（Freud, 1933）。これが、後年「誘惑空想」において母親が「誘惑者」としてあらわれることの「現実の土壌」であるとフロイトは考えた。ここでフロイトが用いている「誘惑」という概念は、もともとは「ヒステリーの病因」としての「外傷的な「幼年期の性的経験」に関連する概念として用いられていたものである（Freud, 1896）。

フロイトが、乳幼児の世話する母親に「誘惑者」としての側面を見出すとき、ここには、「病因」としての母親のあり方というニュアンスが込められている。そしてフロイトは、「両親の情愛が深すぎることは子にとって「有害となる」と見なした（Freud, 1905）。なぜ、「両親」（文脈的に言って、とくに母親）の「情愛が深すぎることは「有害となる」のだろうか。そ

れは、「愛撫」によって「性の成熟が早められ」たり、「甘やかされることによって、後年、愛情を一時的に放棄することができなくなり、あるいはわずかな愛情で満足することができなくなる」からだ、とフロイトは述べている。

「両親の情愛が深すぎる」ことは、子に対する「愛撫」と「甘やか」し（の過剰）としてあらわれ、子はそれを体験する。「愛撫」と「甘やか」しの差異は、「欲動」と「愛」の差異に対応させるとわかりやすい。「愛撫」は、「欲動とその諸対象との関係」における、身体器官と外的（部分的）対象との接触を意味しており、「甘やか」しは、「全体自我とその諸対象との関係」における（「全体表象」としての両親からの）「愛情」の（過剰な）供給のことをさしていると考えられる（Freud, 1915）。フロイトは、「全体自我」および「愛」の成立をファルス期に設定しており、両親からの「情愛」を（「情愛」として）子が感受しうようになるのもこのファルス期以降であると見なしていると考えられる。

このことが大切だと思われるのは、フロイトの“子に対する「情愛が深すぎる」、「神経質症」の両親の像”（「甘やか」しのイメージ）が、幼児期の親子関係を中心にして作られていることを指摘しておく必要があるからだ。

「愛撫」に関しては、乳児期からさまざまな部分欲動がそれによって喚起されるとフロイトは見なしている。乳幼児期における「愛撫」の過剰が、「性器領域に対してもその効果を現すようになり、そのことが「性の成熟」を早めるというのが、フロイトの見解であった。この意味では、フロイトは、乳児期の母子関係における体験（過度の情愛のあらわれとしての愛撫）が神経症の素因となりうると述べていることになる。ただし、ここでも「性器領域」に対する「効果」が重視されており、ファルス期における親子の関係がフロイトの念頭にあることがうかがわれる。

フロイトにとって、乳児期における母の「愛情欠如」（Freud, 1933）よりも、（乳）幼児期

における母（両親）の「情愛が深すぎる」ことのほうが「有害」と考えられているように思える。乳児においては、「愛情」自体は感受されないし、「お乳という最初の食べ物」に対する「渴望」が満たされないのは普遍的なことだと見なされている。その一方で、（乳）幼児期における母（両親）の「情愛が深すぎる」ことは、「愛撫」と「甘やか」しを通じて、神経症の素因としての「固着」を作ることになる言われている。

フロイトの神経症理論において、「母親への「固着」」はとても大きな意味を持っている。フロイトは、神経症の「症状形成」の機制を説明するなかで、「固着」に関して次のように述べている。

「リビードが、不首尾に終わった対象の代わりに別の対象を受け入れようという態勢になっているのに、なおかつ現実があくまで容赦なく拒否しつづける場合には、リビードは結局、退行の道をとって、かつて克服された[リビード]編成のどれか一つにおいて、もしくは以前に断念された対象のどれか一つを通して、満足を得ようと努めざるをえなくなります。リビードは、自らの発達途上のこれらの個所に残してきた固着によって、退行の道へとおびき寄せられてゆくわけです」(Freud, 1917b)。

ここで「以前に断念された対象」と呼ばれているものの代表は、これまで見てきたとおり、母親であると考えられる。「母親への「固着」」が過度であることは、神経症の素因のひとつとなる。

フロイトは、神経症の「生物学的要因」として、人間のいわゆる「生理的早産」が、母親（あるいはその代理）の「価値」を「巨大化」させる点を挙げている（Freud, 1926）。これは言わば、母親への固着の、生物学的観点からの普遍化であると考えられる。母親への固着は、生物学的要因および系統発生的基礎によって人間に普遍的に存在し、個別적으로는、母（両親）の「過度の情愛」（ある場合には父親の不在）によって強力なものにされる、とフロイトは考えたこ

とになる。

#### 第5節 系統発生的基礎と偶有的体験

フロイトは、神経症の素因としての「リビード固着」が、「性的体質」と「幼児期体験」とによって「相補」的に構成されることを論じた個所で、「リビード退行のもっとも顕著なもの、すなわち性的編成のより早期の段階への退行は、圧倒的に遺伝体質的な契機によって規定されているのではないか」という問いを提示している（Freud, 1917b）。ここでいう「遺伝体質的な契機」は、「有史以前の体験」に基づくもので、系統発生的な体験の累積が「体質」として身体に担われたものをさしている。また、「性的編成のより早期の段階」とは、具体的に指示されていないが、口唇期（から肛門期にかけて）をさしているものと考えられる。

フロイトは「性的編成のより早期の段階への退行は、圧倒的に遺伝体質的な契機によって規定されている」という命題を、最終的に肯定している。このことは、フロイトの最晩年の言葉（乳児期あるいは哺乳体験においては「系統発生的基礎の方が個人の偶有的な体験に比べてはるかに支配的に働く」）から明らかである（Freud, 1940）。

なぜフロイトは、「系統発生的基礎の方が個人の偶有的な体験に比べてはるかに支配的に働く」と考えたのか。これには、ここまで取り上げてきた、胎児期の無関心、乳児期の部分的な対象関係、乳児の自体性愛というフロイトの理論的枠組みが関係している。フロイトは、乳児期の性を自体性愛を基盤に考えており、母親との間の性的関係は、生命維持活動に依托された、限定的で部分的な関係であると見なした。胎児期においては母親は対象として存在しておらず、乳児期においても、生命維持活動の範囲において部分的に対象となるだけである。「性的編成のより早期の段階への退行」は、「性欲動にはじめての満足をもたらした自体性愛」への「回帰」であり、自体性愛的な満足は「偶有的」、個別的な環境側の条件とは関わりなく得

られるものであると見なされている。ここでは、乳児期における母と子の二者関係の質は、(過度の愛撫以外は)問われることがない。フロイトは、母親というものを、系統発生的な観点からは重視しながらも、実際の母親の個別的な存在の仕方という観点からは軽視した、と見なすことができる。

このフロイトにおける“実際の”早期母子関係のあり方の軽視は、フロイト以後の精神分析学の展開や、日本における精神分析学の発展のなかで、さまざまな批判や修正を受けることになる。次章では、その一例として、小此木啓吾のエロスのコミュニケーション論を検討する。

### 第三章 小此木啓吾の早期母子関係論

#### 第1節 一方交通と二面交通

小此木は、フロイトの「性本能論」の「際立った特徴」を、それが「個体本位」的、「一方交通的」とあるという点に見出している(小此木, 1970)。これは、フロイトが「対象愛」を「ナルシズム」の「性対象」への「転移」として捉えていることと関連している。フロイトは「対象愛」を、自体性愛—ナルシズム—(同性愛的)対象愛という順序を経て達成されるものであると見なした(Freud, 1904)。性がその起源においては自体性愛的であるというフロイトの想定背景には、性欲動(リビード)を個体の身体的な過程の「心的代理」として捉えるフロイトの前提があると考えられる(Freud, 1905)。

フロイトは、ある器官における内発的な「刺激」を、「外的刺激」によって「解消」あるいは「相殺」することが、部分欲動における(あるいは、幼児の性欲動における)「目標」とあると見なした(Freud, 1905)。フロイトは「性源域」の一例として、口唇期における口唇領域を挙げている。口唇期における「外的刺激」の代表例としては、哺乳時に乳頭から得る刺激と、おしゃぶりのさいに(例えば)指から得る刺激とのふたつが挙げられる。ここで疑問が生

じる。フロイトの「性目標」の「定式」からいうと、「外的刺激」が母の乳頭によってもたらされようと、自身の指によるものであろうと、性的な過程として大差ないものとして考えられることになるのではないだろうか。(食の過程としては大きく異なるとしても。)乳児において、母から授乳される体験と、自身の身体の一部をおしゃぶりする体験とは、性的な過程として大差ないと考えることは妥当か。あるいは乳児にとって、母親は、その性的過程において単なる「外的刺激」として作用するだけだ、と考えることは妥当なのであろうか。

小此木は、ハーローの赤毛ザルの実験を例に挙げ、それについて論じるなかで、これらの疑問にひとつの回答を与えている(小此木, 1970)。

小此木は、「人工マザー」に育てられた赤毛ザルは、「人工マザー」が赤ん坊ザルの「接触欲求」にたいして「肌ざわり、あたたかさという感覚的満足を与えてくれ」たにもかかわらず、子ザルのときには「攻撃的な行動をくり返し、「オトナ」になってからは、「どんな性的欲求ももたないし、いかなる性的行動も示さなかった」と述べている。この「人工マザー」は、単なる「外的刺激」としての「マザー」の具現化であるとみなすことができる。「人工マザー」と「ほんものの母親」との間にはどのような差異があるのか。

小此木は、「生きている」母親には「母性本能」(「母性的エロス」)があり、乳児の「本能」と「母親の母性本能」とは「相互循環過程」にあると見なした。この「相互循環過程」は、どちらか「一方」の「感覚的満足と快の追求」ではなく、「相手の欲求を充たすことが自分の快であり満足である」という「相互的な」性的過程であるとされる。

ここで小此木が「母性本能」と呼んでいるものは、フロイトにあっては、“女性のナルシズムの、子どもへの転移”および“女性の、その母親への同一化”という定式と、ある面においては対応していると考えられる(Freud,

1914, 1933)。フロイトは、女性の“母”としての子に対する性的なあり方を、「先天的」なものとしては考えなかった。それは、女性のペニス羨望が、赤ん坊への欲望に「変転」することを背景とした、発達の到達されるものとしての性的なあり方であった。あるいは、女性（女兒）のエディプス期以前の「母親拘束」が、母への同一化として回帰してくるものであった。この“母への同一化”という機制は、フロイトにおいても、ナルシズムの対象選択をおして「相手の欲求を充たすことが自分の快であり満足である」ような状況を作り出すと考えられている。

そうすると、フロイトもまた、“性”を「二面交通的、相互的」なものと考えた、と言えるのだろうか。どうもそう断言することはできないように思われる。フロイトには、相互のナルシズムの重なり合い（例えば、母の子に対するナルシズムの転移と、子の原始的なナルシズムとの対応性）というイメージはあっても、相互交流や相互理解、小此木のいう「コミュニケーション」というイメージは乏しいように思われるからだ。小此木は「相互的」な性的関係において営まれるコミュニケーションのことを、「エロスのコミュニケーション」（以下、エロスのコミュニケーションと表記する）と呼んだ（小此木, 1970）。

小此木の（母子間の）エロスのコミュニケーション論の特徴のひとつは、小此木が三段階の「エロスの発達」を想定している点に求められる。第一段階においては、乳児は“一方的なエロスを持つ存在”であり、乳児にとっては、「エロスの対象は、“もの”でも代用できる」とされる。それに対して母親は、「乳児の一方的な本能的欲求の表出を意味づけ」、それを充たすことを通して母性的な快を体験している。第二段階において乳児は、母の「応答」あるいは母の「快」にたいして開かれていく。乳児は「コミュニケーション」というものに開かれていく、とも言える。乳児は、エロスのコミュニケーションのなかで、自身の快が同時に相手の快で

あること、相手の快が同時に自身の快であることを察知し、「快感を共有」するようになる。そして第三段階においては、「一致と共有の体験そのもの」が求められるようになる。そう小此木は考えている。

フロイトの性的発達論においては、出生や離乳、去勢不安といった断絶や喪失が重視されているのに比べ、小此木の性的発達論においては、エロスのコミュニケーションをとおした母と子の間の「快感」の「共有」が重視されている。この「共有」の体験の現実的、具体的なくり返しが、（「同じ感情・欲求の一致・共有」としての）「共感」を目指すコミュニケーションにまで発展し、この「共感的なコミュニケーション」は、「欲求」を「具体的に満たす」ことを離脱したのちまでも続いていくと考えられる。フロイトにおいては、これまで論じてきたところをふり返っても、母と乳幼児のコミュニケーションというイメージは希薄であり、「子供に対する情愛」を「うまく加減」することの必要性や、“過度な情愛”の有害性の指摘に見られるような、（あるいは、新生児の母に対する“無関心”や、口唇期における部分的で器官的な対象としての乳房に限定された母親像という設定にみられるような、）距離のある、限定されたものとしての母と子の関係のイメージが念頭に置かれているように思われる。そしてそのような限定された母子関係のひとつの極端なイメージが、自体性愛的な乳児と「外的刺激」としての母親との間の、物理的な接触のイメージである。

## 第2節 母性原理的世界と、フロイト以後の精神分析の潮流

小此木は、母と子の間のエロスのコミュニケーションという着想が、フロイトの記述（「心理学草案」）からも示唆を得たものであることを明らかにしている（小此木・及川, 1981）。ここでフロイトは、乳児は、「内因性の刺激」の高まり（例えば空腹）を、はじめは「内的変化」とおして「放散」するが、それでは「負荷」は「軽減」されず、「経験ある個人」（すな

わち母親あるいはその代理)の「援助」(例えば授乳)によって、「緊張」の消失が可能になると述べている。そしてこの過程により、「放散軌道」は「意志疎通というきわめて重要な二次的機能を獲得する」と見なされている。

小此木はフロイトのこの見解に対して、「この着想の中で、すでにフロイトは、乳児の一方的な生理的表出過程が、母親にとっては、欲求満足を求める呼びかけとして、つまり一つのコミュニケーションとして認知される事実を洞察していたのである」と述べている(小此木・及川, 1981)。

小此木らは、「心理学草案」における該当箇所を、「フロイトのほう大な論文、著作の中からとり出すことのできるもっとも重要な部分の一つであると考え、精神分析の考え方の全局面が、この一文で一挙にあきらかにされていると考える」と述べている。小此木が、「心理学草案」の記述をフロイトの著述のうちの「もっとも重要な部分の一つであると考え」る理由のひとつは、小此木がこの個所に、フロイトの精神分析学と、日本的な精神分析の実際とそこから生まれた理論(古沢平作の阿閩世コンプレックス論)との間にあるズレの、接続点を見出したからであると思われる。

小此木の(いわば)師にあたる古沢平作は、「昭和八年(一九三三)ウィーン精神分析研究所に留学し、S・フロイトの指導下で日本人としてはじめて正式に精神分析を学んだ、「日本で最初の精神分析医」である。小此木は、古沢が発展させた「日本人独自の治療方法と理論」の概要として、(1)日本人患者の治療においては、「母子関係をめぐる葛藤」(「阿閩世コンプレックス」)が「中心課題」としてあらわれる傾向にあり、「この解決が治療の眼目である」こと、(2)治療者の役割は、失われた母と子の「一体感」、「融合感」を、治療を通して患者に「再体験」させるものであること、の二点を挙げている(小此木, 1989)。

小此木は、このような古沢の母子関係を中心に据えた日本的な理論と実践の世界を「自他融

合の仏教的な慈悲の世界—母と子の世界」(「母性原理的世界」)と呼び、フロイトの「父と息子の対立する厳しいヨーロッパ的世界」(「父性原理的世界」)と対比させている。上述したように、小此木が『科学的心理学試論』(「心理学草案」)のあの部分を重視したのは、フロイトの「父性原理的世界」と古沢—小此木の「母性原理的世界」とを接続するための、連結点をそこに見出したからであると思われる。小此木は、古沢の「阿閩世コンプレックス」を解説するなかで、こう述べている。

「ここに見られる際立った対照は、子供心理本位の一方交通的なフロイトに対して、むしろ古沢が、親側の態度、とくに性愛を越えた親としての愛に注目している事実であり、子供心理をこの親子の相互交通(コミュニケーション)の一面としてとらえている事実である」(小此木, 1973)。

ここで「性愛を越えた親としての愛」と呼ばれているものは、これまで見てきた、「一方交通的な本能以上の何か」としての母親の「相手の欲求を読みとり意味づけそれを充たしてやりたいという欲求」(「母性的エロス」)に対応させることができるものだ。小此木は、古沢の注目した「性愛を越えた親としての愛」を、「現代動物生態学」の視点を借りて、(母性)「本能」の「発達」という着想をもちいて根拠づけようとしたのだと考えられる。

このような母子関係への着目は、日本の精神分析の特性と関わると同時に、「フロイト以後の精神分析に共通した認識」でもある。小此木は「自我心理学」の特質を解説するなかで、「エディプス期以前」の母子関係への着目が、フロイト以後の精神分析の世界的な潮流であることを指摘している(小此木, 1989)。小此木のエロスのコミュニケーション論は、母子関係が中心課題としてあらわれる傾向にある日本の精神分析をとおして生まれた理論と、フロイト以後の精神分析の世界的な展開の、ひとつの集約であると考えることができる。

### 第3節 エロスのコミュニケーション論の課題

小此木は、エロスのコミュニケーションが「言語以前のコミュニケーション」であることを強調している。そしてそれを、「動物」としての人間という次元に基礎を持ったものとして考えている（小此木、1970）。

フロイトが母親を「外的刺激」として抽象したことに対応させて言えば、小此木は、（エロスのコミュニケーションにおける）母親を、生物学的な“ヒト”という側面で抽出しているように思える。そして小此木が強調したのは、「本能そのもの生物学的なものそのものが、本来意味的なもの、コミュニケーションを含蓄した、「二面交通的」なものである、ということだ。フロイトが欲動（小此木のいう「性本能」）を、個体の身体に還元したところで、小此木は「本能」自体の相互性、ある個体と「他の個体」との間の「二面交通」性を打ち出した。それにより小此木は、フロイトの「性本能論」の持つ「個体本位的」な面を克服したと考えたのだと思われる。

その一方で、「エロスの発達」という着想は、小此木のいう「本能」が、単に生物学的な次元にあるものではなく、「共感」そのものへの志向性というかたちで、人間的（あるいは言語的）な次元への架け橋としての意味合いも含んでいることを示唆していると思われる。小此木は、エロスのコミュニケーションにおける母親を、主に「動物」的な次元にあるものとして想定しようとしているが、当然母親は同時に、言語を持った人間的な存在としての母親である。小此木が描く母親のイメージは、小此木がその生物学的側面を強調する度合に応じて、人間的な母親のイメージから遠ざかってしまうように思われる。これと関連することだが、小此木のエロスのコミュニケーションは、いわゆる言語的コミュニケーションの成立とどのような関連性を持つものなのかが（『エロス的人間論』においては）明らかにされていない。乳児は、母とのエロスのコミュニケーションをとおして「共感」というところまでは到達すると見なされている

が、そこから言語的コミュニケーションの成立までは、なんらかのつながりがあるのだろうか。一体、母と子の乳児期までの二者関係は、個体の言語の獲得にとってどのような意味合いを持つものなのだろうか。小此木のエロスのコミュニケーション論は、（これまで見てきたところからは）言語的な存在としての人間との接続という点で、課題を抱えていると考えられる。

また小此木は、乳児期における母と子の性的なコミュニケーションのイメージを、性本能の相互性という観点から明瞭に打ち出したが、その一方で、胎児期における母子の活発な相互作用という想定は、そのエロスのコミュニケーション論のなかには組み込まれていない。そのため、エロスの発達の第一段階においては、母親と“もの”とは等価であるとみなされている。これは妥当であろうか。この点もまた、エロスのコミュニケーション論の課題の一つであると考えられる。

次章で検討する吉本隆明の内コミュニケーション論は、この二つ課題によく応えるものであり、小此木のエロスのコミュニケーション論の進展のためにも、寄与するところが多いと思われる。

## 第IV章 吉本隆明の早期母子関係論

### 第1節 胎児期の内コミュニケーション

フロイトが、胎児は「環境世界」に対して無「関心」である、と考えていることは先に述べた。ところで現在の胎児期についての考え方は、フロイトのこのような考え方に修正を迫るものであると思われる。「エコー画像のような技術の進歩」および諸研究の積み重ねにより、現在では胎児について（フロイトの時代に比べて）より多くのことを知ることができるようになった。胎児の感覚器官は（視覚以外は）「機能的に成熟した状態」にあり、胎児は母親の声を聞いたり、「子宮－胎盤の壁」との接触に対して「反応」したりと、「環境」（としての母親）

との「相互作用」を行っている。また、フロイトが「幼児性欲の現れ」の「手本」であるとみなした「おしゃぶり」も、すでに胎児によって行われていることがわかっている。「環境世界へのすべての関心の停止」(フロイト)から「周囲の環境」との「頻繁」な「相互作用」(ヴォークレール)へと、胎児のイメージは変化している。

この、胎児と環境(母体)との「相互作用」という考えは、前章で取り上げた、小此木のエロスのコミュニケーションの考えにも、修正(前倒し)を迫るものである。

本論では、現在の胎児期に関する知見をふまえた母と子の間のコミュニケーション論のひとつとして、吉本隆明の「内コミュニケーション」論を取り上げたい。吉本は、胎児と環境としての母体との間の「相互作用」を、母と子の間のコミュニケーション(の起源)として位置付け、それを「内コミュニケーション」と呼んでいる。本章は、この「内コミュニケーション」論の検討を主眼とするものである。

胎児期における母と胎児との間のコミュニケーション(内コミュニケーション)について吉本は、「母親が思い、感じたことはそのまま胎児にコミュニケートされ、胎児は母親とほとんどおなじ思いを感じた状態になる」と述べている(吉本, 2004)。吉本は、母親の心的状態が、胎児(および乳児)の心的状態へと「転写」されると考え、それを内コミュニケーションと呼んだ。何故このような「転写」が想定されるのか。吉本は、二種類の伝達経路を挙げている。

一つは「臍の緒」をとおした「代謝」の経路であり、もう一つの経路は胎児の感覚作用である。

胎児は臍の緒で母体とつながっており、「外の環界の変化を感じて母親の感情が変化すると代謝に影響するため、母と子の内コミュニケーションは同体に変化する」と吉本は述べている。この「代謝」の具体例として、母体の分泌するホルモンの胎児への伝達が挙げられる。

バーニーによると(吉本は、バーニーの説を参照している)、母親がなんらかの「感情」(例えば「恐怖」)を感じると、それに対応した「神経ホルモン」(例えば「カテコールアミン」)の分泌が促進され、それが血液に運ばれて「胎盤という障壁を通過」し、胎児にも生理的反応を生じさせる。母親の側においては、感情の生起から肉体的変化へと矢印が向いているのにたいして、胎児の側では、肉体的変化から「きわめて初歩的なかたち」の感情の発生へと、(母親とは)「反対方向に」矢印が向かっていくと考えられている(Verny & Kelly, 1981)。吉本が「代謝」と呼んだのは、「臍の緒をとおして」受け渡される「生命維持の流れ」の総体のことであり、神経ホルモンはその「流れ」の構成要素のひとつとして内コミュニケーションの成立に寄与していると考えられる。

もうひとつのコミュニケーションの経路は、胎児の「感覚」である。「受胎後五～六ヵ月」以降の胎児は、「感覚能力」がはたらいており、「感覚的なことがほとんどわかっている」。そして感覚作用をとおして、母親の状態やその変化を受け取ることになる(吉本, 1999)。

吉本は、胎児期に胎内で形成される感覚作用を「内感覚」と呼び、出生以後に形成される「外感覚」と区別している。「内感覚」の特徴のひとつは、視覚に対しての聴覚の優位にあると思われる。胎児期後半において視覚は、潜在的には外からの刺激(光)を受容しうのような状態にあるが、実際には「お母さんのお腹の皮膚を通り抜けて入ってきた光を目で見ているわけではない」(太田, 2014)。その一方で、聴覚は、母親の心音(の変化)や母親およびそれ以外の人の音声を「羊水と胎壁をへだてて」聴いている状態にある。吉本は、人間が出生したのちに「外界の光に感応して視たり聴いたり外感覚をしだいに形成して、それを使って知覚作用を営むようになって、内感覚は潜在的には保持されており、それがなんらかのきっかけで再びあらわれることがあり得ると述べている(吉本, 2001a)。

ここまで、内コミュニケーションが、「代謝」と「感覚」という2つの経路を用いて営まれることを見てきた。この2つの経路は、それぞれ(胎児の)「植物性器官」と「動物性器官」という、人間のからだを構成する「二種の器官群」に対応している(三木, 1997)。吉本は、発生学者の三木成夫を参照するかたちで、人間のからだを「内臓系」(「植物性器官」と「体壁系」(「動物性器官」との「高度」な「からみあい」として捉えている(吉本, 1997)。それをふまえていうならば、「代謝」のコミュニケーション経路は胎児の「内臓系」に直接的に作用し、「感覚」のコミュニケーション経路は、「体壁系」(これは諸感覚器官を含んでいる)のはたらきが主となる感覚作用によって成り立っていると考えることができる。そして、この2つの経路でもって母親の心身の状態とその変化が胎児に伝達されことになる。これは、フロイトの用語でいえば、胎児にとっての「外的刺激」は母親の心身の状態とその変化そのものであり、「内的刺激」も母親の状態の影響を直接的に受けている状態にあると考えることができる。

それでは、胎児は、この2重の経路でもって、母親の何を伝達されているのか。吉本はこれを、ある個所では「母親が思い、感じたこと」であると言っており、また別の個所においては「母親の内臓の動き」であると言っている(吉本・田原, 1993)。一見すると、前者は母親の心的状態を、後者は生理的なものをさしている、そこには次元のずれがあるように思われる。心的状態と「内臓の動き」とはどのような関係にあるのか。

吉本は、人間の「精神現象」を、「心的現象」と「知覚現象」の「混淆したもの」とみるとみなした。そして「心的現象」は「内臓器官の動きが主となって出てくる精神現象」であり、「知覚現象」は「動物器官、感覚器官から出てくる人間の行動や精神の動き」であると言っている(吉本, 2001b)。胎児は、「代謝」と「感覚」の二重の経路で「母親の内臓の動き」を伝達されることを通して、母親の「心的」な状態とそ

の変化を、知覚的にも心的にも、体験していると考えられる。

フロイトは、個体がはじめて不安(あるいは外傷)を体験するのは、出生の場面であるとみなした。その背景には、胎児は母体内において刺激から保護された状態にあり、また、胎児自身も無関心の状態にある、というフロイトの胎児期のイメージがある。吉本の胎児期論においては、母親の心的状態が不安であれば、内臓のうごきの伝達(内コミュニケーション)を媒介として、胎児も不安の原型となるような心身の状態を体験していると考えられる。また、それが、外傷と呼ばれるべき強度にまで高められる場合も想定されている(これについては、第VI章で述べる)。

胎児期の内コミュニケーションに関して、もうひとつ、触れておきたいことがある。それは、胎児期の内コミュニケーションにおける「性」ということだ。吉本は、「胎児は、幻想としては男〈性〉でも女〈性〉でもなく汎〈性〉あるいは〈性〉自体なのだ」と述べている(吉本, 2008)。胎児が「幻想」(観念)的には「汎〈性〉」的であると言われるとき、これは「母親」および「環界(としての母胎)のすべて」と胎児との関係を前提としている。これは吉本が(生理としての性ではなく)観念としての性を、一人の個体ともう一人の個体との間の(対の)関係のなかから表出される観念の世界(吉本の用語でいえば、「対幻想」)であると見なしていることに基づいている(吉本, 1982)。胎児期の「内コミュニケーション」は、母(体)と胎児との間の性的なコミュニケーションであり、個体発生における性的なコミュニケーションの起源として位置付けられる。

## 第2節 乳児期の内コミュニケーション

これまで、主に胎児期における母と子のコミュニケーションとして、内コミュニケーションを見てきた。この場合、「内コミュニケーション」は、出生以後の「外コミュニケーション」と対になる概念として想定されている。



だが吉本は、その思考の歩みのなかで、内コミュニケーションという概念を出生以後のコミュニケーションにまで拡張させて考えるようになった。そこでは内コミュニケーションという概念は、母とその体内にいる胎児とのコミュニケーションという意味ではなく、前言語的（非言語的）コミュニケーションという意味合いで使われている。

吉本はまた、「内コミュニケーションの段階」というものを設定している。「内コミュニケーションの段階」は、個体が言葉を獲得する以前の「五～六カ月の胎児から一歳未満まで」である。この段階では、言語的なコミュニケーションはまだ成立しておらず、内コミュニケーションが、（前言語的なコミュニケーションとして）唯一のコミュニケーションのあり方であると考えられる。ここでは、個体が言葉を獲得する以前のコミュニケーションのあり方のことを、内コミュニケーションと呼んでいる（吉本、1999）。

これらのことをまとめると、内コミュニケーションとは、胎児期にはじまり、出生後言葉を獲得するまでの間の前言語的なコミュニケーションのあり方のことであり、言語獲得後も、言語的コミュニケーションと併存するかたちで行われていくものである、ということになる。

母親と新生児の内コミュニケーションは、母親（あるいはその代理）の子に対する関わり全体のなかで行われる。吉本はその「要素」として、(1)抱くこと、(2)授乳、(3)眠らせる、(4)排便その他の世話からなる養育行為、を挙げている（吉本、2004）。これらの母親の行為は、母親が能動的に行い、新生児（乳児）は受動的な存在としてその行為を受ける。新生児（乳児）にとって母親との関わりの領域が「世界環界のぜんぶ」であって、その行為に伴う母親の「心の物語」は、「おなじ物語」として、子の「心の物語」に「転写」されるとみなされている。別の言い方をすれば、「母親が何をおもっているかは、すべて伝わる」ということになる。なぜならば、子は胎児期においてすでに母親との

内コミュニケーションの体験を持っており、それが出生以後の内コミュニケーションの基礎付けとなっているからだ。フロイトが、胎乳児にとっての母親は、無（非）対象あるいは部分的対象であると見なしたのとは反対に、吉本は、乳（胎）児期においては「母親のほかに対象となるものは存在しない」と述べている。

乳児が母から内コミュニケーションを通して「転写される」のは、「社会の現在（現在性）の水準にある母親の高度で複雑な心的世界の動きと摂動」である、と吉本は述べている（吉本、2008）。この「転写」は、個体の言語の獲得とつながりを持っている。「言語」は、人類がその歴史のなかで生み出し、現在の水準にまで精錬してきたものである。乳児は、母親との間の内コミュニケーションを通して、「言語」の「現在性の水準」のとはば口に立つことになるのだ。

### 第3節 内コミュニケーションとしての授乳

フロイトは、「母の乳房の吸引」が「性的生活全体の出発点」であると考えた。吉本は“胎児の幻想的な汎性”を想定しているのだから、乳房の吸引が性生活の出発点であるとは言わないだろうが、授乳が母と子の性的関係において行われる性的な行為であると考えたことは、その対幻想の考え方からいって明らかである。吉本は、授乳は「青年期以後での性的結合」に「対置」し得るような、性的（生殖）行為であると述べている（吉本、2008）。

乳児期における母と子の授乳行為が、青年期以後の性行為と「対置」しうるのはなぜか。あるいは、食行為としての授乳行為が、同時にエロスの行為でもありうるのはなぜか。ここでは吉本は、これらの問いに（三木成夫の）発生学の視点をを用いて答えている。

乳児の口腔と舌は、人間の身体全体がそうであるように、「内臓系と体壁系とのからみ合い」によって構成されている。（「発生学的に言えば口（腔）は鰓腸の入口にあたっていて、身体の表面の皮膚が入り込んで凹んだところだ。そしてこの口（腔）の内部で体壁の筋肉に持ち上げ

られて舌ができた』)。これは「生殖性器」も同様であり、雌雄とも「内性器」（主に内臓系）と「外性器」（主に体壁系）とによって構成されている。そして「性的な感覚（エロス覚）」は、内性器の「内臓感覚」と外性器の「体壁の筋肉や神経の感覚」との融合したものである、と吉本は見なしている（吉本、2004）。

性交行為も、授乳行為も、一方の器官が「排出」し、もう一方の器官がそれを「受容（摂取）」するという関係において、構造的に同型であると言える。そして、性交行為は「性的な行為」であると同時に「広義の栄養の受容と食行為」であり、授乳行為は食行為であると同時に、母親の乳頭が雄性の外性器に、乳児の口腔と舌が雌性の（内）性器に擬えられる「性的な行為」である、と考えられる。そこでは乳児は、内臓感覚と体壁の感覚が融合した「性的な感覚（エロス覚）」を、「味覚」と「同調」するかたちで体験しているとみなされる。吉本は、この「授乳」における「食行為」と「性的な行為」との「共時性」は、「成長して食と性が分離したあともなくならず、二重の層になって対応している」とし、この「共時性」が、「内臓系からやってくる心の動きと体壁系につながる感覚の作用からできた織物に、いわば普遍的な性の意味を与える」と考えた。

この「内臓系からやってくる心の動きと体壁系につながる感覚の作用からできた織物」という言い方は、遡れば、胎児期においても適用可能な概念である。「代謝」と「内感覚」との2つの経路で伝達された母の「内臓の動き」（これは体壁系の作用を受けて変化する）が、胎児のうちで“織り合わされている”と考えることができるからだ。吉本はこの「織物」の「拡がり」ことを、別の言葉で「大洋のイメージ」と呼んでいる。「乳（胎）児」期における内コミュニケーションは、「母と子の心の関係と感覚の関係が織り出される場所」であり、乳（胎）児は、母という世界との関係において、感覚（知覚）と心の総合としての精神を織り上げていくと考えられる。

フロイトは、幼児の性の「頂点」をファルス期であるとしている。これに対比させて言うならば、吉本は、乳（胎）児期の母子関係における感覚的な接触とそれに伴う内コミュニケーションに、性の第一次的な「頂点」を見出しているように思われる。乳（胎）児期における母と子の関係が時間性（異世代間）としての性の開花（「頂点」）であり、青年期以降の性は空間性（同世代間）としての性の開花であると言うこともできる。そして、フロイトがファルス期における母との（あるいは女兒においては父との）近親相姦が断念に終わると考えたのに対し、吉本は、女兒においても男児においても、授乳行為を通して乳児は母との性行為を実現している（「乳児はじかに乳汁を摂取する行為において、性の行為との同調をとげている」）と見なしている（吉本、2004）。フロイトがこのときの母親を乳房という部分であると考えたのとは対照的に、吉本は、このときの乳房に集約される母親は、乳児にとっての「全世界」であると考えた。そしてフロイトが、乳房を物理的的刺激というところにまで抽象するのに対して、吉本は、この時期の母親が人類の精神性の現在の水準を体現するものとして、乳（胎）児に（内コミュニケーションを通して）その水準を「転写」すると考えたのだ。

性的な行為としての授乳（あるいは性的なコミュニケーションとしての内コミュニケーション）という見方において注目すべきことは、母親が観念的な男性（能動性）であり、乳（胎）児のほうが観念的な女性（受動性）であるとみなされていることだ。これは、授乳における「排出」と「摂取」の関係において、乳児の側が女性的位置付けであるということだけでなく、内コミュニケーションの全体にわたって（これは産む／生まれるということも含んでいる）、母親（およびその代理）が能動性であり、胎乳児の側が受動性であるということに基づいている。フロイトは、前エディプス期においては、女兒も男児と同様に「男性的段階」にあり、女兒は「ペニス羨望」を介して「男性的段階」

から「女性的段階」へと移行していく、と考えた。吉本はこれに対して、女兒と男児双方の「男性的段階」に先立って、両者ともに女性的である時期が存在していると言っていることになる。この時期は、先程吉本が「内コミュニケーションの段階」と呼んだ「五～六カ月の胎児から一歳未満まで」の時期であり、吉本はこの時期をとくに「『大洋』期」と呼び、幼児期から明確に区分したうえで考察すべきだと考えたのだ。そしてこの大洋期と幼児期を区分けする指標は、言語の獲得である。大洋期における乳(胎)児は(母との関係において)「女性的で受動的」であり、「これがフロイトのいう男児的な本質に転換するには、どうしても前言語状態から言語が獲得されてゆく過程を必須の条件だとみなくてはならない」と吉本は述べている(吉本, 2004)。この過程は、内コミュニケーションが言語へと至る過程であり、食と性の融合状態にある乳(胎)児的な性が、言語へと「収蔵されて」いく過程である、と吉本は見なしている。

#### 第4節 音声の内コミュニケーション

人間の音声もまた、内臓系の動きと、体壁系の動きの二重のはたらきによって発せられるものであり、「大洋のイメージ」で捉えうるものだ。そして、音声を内臓系のはたらきの側面からとらえるとき、「音声は内臓管(腸管)の聴覚的な表情」であると言われることになる。音声は(「体壁系」の作用を受けた)「内臓の動き」の表出として、内コミュニケーションの媒体となる。音声は、内臓の動きと、体壁の動きの二重性の表現として。人間の精神(知覚と心)と同型の構造を持っている。人間の精神も、内臓の動きから生まれる心と体壁の作用から生まれる感覚との織物であると考えられるからだ。

内コミュニケーションが、母と乳(胎)児との間の性的なコミュニケーションであり、また、(授乳における食と性との「共時性」のために)「普遍的な性の意味」を持つという考え方からすれば、音声も当然、性的なコミュニ

ケーションの媒体として性的な意味が与えられる。

母親の発話は、「乳(胎)児」にとっては「意味」のある言葉ではなく、母親の内臓の動きと体壁の作用の織物(言い換えれば、「感覚と感情の織物」としての音声そのものである。「乳(胎)児」は音声(の音源としての母親)を聴覚的に触知することで、(性的な)内コミュニケーションが成立する。内コミュニケーションにおける音声は、“心と感覚の前意味的な織物”であり、「言葉以前の言葉」(吉本, 1999)である。そして、この「言葉以前の言葉」という性格は、母と乳(胎)児のあいだの内コミュニケーションの全領域にまで拡張することができると考えられている。なぜならば、内コミュニケーション全体が、内臓から生まれる心と体壁の作用である感覚との織物(大洋のイメージ)を織り出す場であるからだ。

#### 第5節 言語の発生

吉本は、(音声的な)内コミュニケーションが言語の発生へと至る過程を、三段階にわけて提示している(吉本, 2004)。一)「アワワ」言葉の段階、二)擬音や前意味的な音声の段階、三)概念の「同定」の段階、の三段階である。

「アワワ」言葉や「擬音」(これは、母およびその代理と、乳児との、両方の発語を含んでいる)は、乳児にとって「意味」としては受けとられて(発せられて)いない。これらの「前意味的な音声」は、音声そのものとしての音声から、言葉としての音声へといたる、その過程に位置づけられる。その過程において乳児は、音声から音韻を抽出していくと考えられる。第三段階にいたって「概念」が登場してくることにより、音声は言語として発せられることになる。

吉本は「概念」を、“対象の感覚的な受容とその了解、およびそれによって喚起される反応”(吉本のいう「生命の過程」)の「ながい歴史」の中でのくり返しの果てに抽出された、「折り畳まれた生命の糸」であると表現している(吉本, 2003)。また別の個所では、「視覚作用」(一

般には感覚作用全般)の「次元を離脱することで、はじめて可能な、無数の対象に共通した心的くくり方である」とも述べている(吉本, 2013)。「概念」は、(その「発生期」においては、)対象との感覚的な接触に基盤を持ちながらも、感覚的な次元を離脱することで可能になる抽象的な「心的くくり方」である。吉本は「母親の乳房をなめまわし、触れたり、嗅いだり、味わったりした感受性と感覚の胚芽ともいべきものの体験は、つぎの段階ではこの『概念』の同定を容易にするにちがいない」と述べている。大洋期の内コミュニケーションは乳(胎)児にとって、概念の「発生期」としての「生命の過程」の個体発生的な反復過程であり、同時に、母(あるいはその代理)によって担われている、歴史的(系統発生的)な概念抽出の水準の、母から子への授受(転写)の場であると見なすことができる。

概念の同定を前提とする「音声言語の最初の芽ばえ」は、「乳(胎)児期(の母)からの離脱の部分を象徴すること」になると吉本は述べている。なぜならば、乳(胎)児の母へと向かっていたエロス覚(授乳において食行為と同時に実現されるエロス)が概念に「備給」されることによって、言語が成立してゆくと見なされているからだ。

大洋期は、言語の獲得をもって(徐々に)終焉を迎える。ここからは、言語的なコミュニケーションが、(徐々に)前面に出てくることになるからだ。それとともに幼児期がはじまる。フロイトが乳幼児期を、口唇期、肛門期、ファルス期の三つに区分したのに対し、吉本は、胎児期(後期)も含めて乳(胎)児期(大洋期)と幼児期とに二分した。これは、言語獲得以前と言語獲得以後とで、時期を区切ったということだ。そして、フロイトが、幼児期(ファルス期)を最も重視したのに対し、吉本は大洋期こそが、人間の心の形成において第一次的に決定力を持つ時期であるとみなした。大洋期は、これまで見てきたとおり、母と子のあいだの関係が、子の感覚と心のあり方を織り上

げていく時期だ。フロイトの言葉を使えば、そこでの「偶有的な体験」(母子関係の実際のあり方)が、子の「運命」を(第一次的に)決定すると見なされていることになる。フロイトが早期母子関係における「偶有的な体験」の影響力を極力低く見積もろうとしたのに対し、吉本においては、「偶有的な体験」のあり方こそが、子の(生涯にわたる)心の状態の、第一次的でもっとも重要な決定因であると見なされていることになる。

## 第6節 出産の習俗

フロイトの早期母子関係論においては、母と子の分離や切断が強調されているように思われるのに対し、吉本の早期母子関係論は、母と子のコミュニケーションを軸に論じられている。この違いの背景には、両者の属する文化圏の(出産にまつわる)習俗の違いがあると考えられる。

吉本が「ひと昔まえの日本の」出産にまつわる習俗の特性とみなしているものを要約して言うならば、それは、(出産直後からはじまる)“終日続く添い寝の授乳”ということだ。これは、母と新生児との間の内コミュニケーションを習俗的に強調するものであると考えられ、吉本はこれにより「巨大な〈母〉の像が子にとって形成される」と述べている(吉本, 2004)。

吉本はこの“終日続く添い寝の授乳”を、「出産の習俗としては一方の極の典型になるほど重要なやり方」として位置付けている。そしてその反対の極に位置付けられるのが、「割礼」に代表される「ユダヤ=キリスト教」圏(これは、フロイトの属する文化圏である)の出産の習俗であるとみなされている。日本の習俗が極端な母子密着であるのと対照的に、「割礼」に代表される「ユダヤ=キリスト教」的な習俗は、極端な母子の間の(親和の)切断であると考えられる。

このような差異があるため、日本の習俗においては、「ユダヤ=キリスト教的」な習俗に比べ、子は母の心身状態の影響を、より深刻に受

けると見なされている。「西欧のやり方」であれば、習俗として子を母から引き離すので、子は一般的に「面白くない状態」にあるかもしれないが、母親の個別的な存在の仕方の影響力はその分小さくなる。ここでは習俗（いわば、系統発生的なもの）によって（フロイトの言うところの）母への非難が一般的に作り出されることになるが、母親の個別的な存在の仕方と非難との結び付きは、弱められるように思われる。一方で、「日本のお母さんの育て方」においては、母親の心身の状態が「いいか悪いか」ということが、子の「無意識の核のところ」に、そのまま「刷りこまれる」ことになる（吉本、2001a）。

日本の出産の習俗においては、子が母の個別的な心身の状態の影響を（「西欧のやり方」に比して）より大きく、深刻に受けるということが、日本の（精神分析の）臨床において、「母子関係をめぐる葛藤が中心課題になる」傾向が見られることの、要因のひとつであると考えられる。

### 第7節 日本の出産の習俗の共同体論的背景

フロイトが、エディプス・コンプレックスにおいて父が強大な存在として息子に対してあらわれる系統発生的な根拠を、「原始群族」を支配する暴力的な「原父」に求めたことはさきに述べた。フロイトによれば、一神教としてのユダヤ教は「原始群族における父の栄光」の「復活」であり、ユダヤ教における「割礼」の習俗は、「かつて完璧な権力を有していた原父が息子たちすべてに課した去勢の象徴的な代替」である（Freud, 1938）。

吉本はこれとは対照的に、共同体としての日本を遡行していくと、「母系」の共同体に行きあたり、共同体としての日本の特徴のひとつは、その「母系の遺風」を多く残している点にあることを指摘している（吉本、2001b）。

吉本は、母系制の成立を基礎付ける妊娠、出生に関する観念のあり方としての、「母系制認知」について触れている（吉本、2008）。「母系

制認知」においては、妻と夫は自然的な性交行為は行うが、それは受胎、出産とは「無関係」だとみなされる。妊娠が起るのは「おなじ氏族の死んだ誰かの霊がじぶんの子宮に入りこんだため」であり、そのような「認知」のもとでは、妻と夫の間の「性的な結びつき」よりも、兄弟姉妹の間の「性的な結びつき」の方が（共同体的には）「重要で緊密な」ものとなる。ここでは夫（父）は、妻（母）の「氏族」にとって（妻の兄弟に比して）「疎遠」な存在である（吉本、2004）。このような（「氏族外婚制」における）父の位置付けは、フロイトが“原始群族の父”に与えたその位置付けと、著しい対照をなしていると思われる。

「母系制認知」においては、「受胎や妊娠や出生」は「氏族の死んだ誰かの霊魂の再生」であると見なされ、「母と父との性交」の結果であるとは認識されない。父と母のあいだに「性愛の親和」が存在し、それが果たす役割もあるが、その一方で、母とその兄弟のあいだの「性愛の親和」（対幻想）が、重要な役割を果たすことになる。フロイトがその「原始群族」論において“強大な父”の存在を強調したことに対比していうならば、ここには“巨大な母”（同一氏族の母）と“疎遠な父”（他の氏族に属する父）の像がある。さきに述べた「ひと昔まえの日本」における“巨大な母の像”を子に植えつける「出生の習俗」は、この「母系」的なものの遺風を、よく引き継いだものであると考えられる。

吉本は、「母系優位」の共同体の状態を、どの地域の人類（の共同体）であろうとも、普遍的に通過したものであるとみなした。性交行為と妊娠・出産とを関係付けられない「母系制認知」の時期を「人類はすべて通過したに違いない」、と考えられるからだ（吉本、2004）。その上で吉本は、“母系優位の段階”を「すみやかに」通過した地域と、「そうでない地域」とが分かれていった、と述べている。日本は“母系優位の特色を多く残す地域”に該当し、「ユダヤ＝キリスト教」圏は「すみやかにその段階を通過した地域」に対応する。“ひと昔まえの日本の出

生の習俗”が母系制の特色と対応しているとするならば、「ユダヤ＝キリスト教」圏における「母親からこどもを引き離す」出生の習俗は、「母系優位」の「段階」の「すみやか」な「消去」と、何らかの対応関係にあると予想される。吉本の母子関係論が、日本の習俗を前提としているように、フロイトの母子関係論も、フロイトが属する文化圏の習俗に影響されたものである。フロイトの母子関係論においてコミュニケーション論が希薄な理由の一端は、この習俗的な特性（割礼に代表されるような、母と子の親和の切断）にあると思われる。一方、日本の精神分析学（古沢—小此木）が、母子間の交流にこだわったのも、日本の習俗における母系的なものの残存度の高さが背景にあつてのことだと考えられる。

## 第V章 吉本と小此木およびフロイトとの比較検討

### 第1節 吉本と小此木との比較検討

ここでは、小此木のエロスのコミュニケーションと、吉本の内コミュニケーションの相違点を三点指摘しておきたい。

一つ目は、小此木のエロスのコミュニケーションが胎児期の無関心というフロイト的な想定を前提としているのに対し、吉本の内コミュニケーションは胎児期にはじまり、むしろ胎児期であるからこそ可能になるようなコミュニケーションである、という点である。内コミュニケーション論においては、乳児期の内コミュニケーションは胎児期における内コミュニケーションの形成に基礎付けられており、胎児期においても新生児期においても母親は心身相関の生きた存在として胎（乳）児と性的なコミュニケーションを営んでいると考えられている。

二つ目は、母子間のコミュニケーションの方向性に関わることである。小此木のエロスのコミュニケーションが、どちらかという母親の側の、子の信号の読み取りや意味づけに重点を置いている（先行性を認めている）のに対して、

吉本の内コミュニケーションにおいては、乳（胎）児の側の、母親の心身の状態（の変化）の受容、察知のほうに比重が置かれている。これもまた、胎児期の捉え方の相違が背景にあると考えられる。

三つ目は、エロスのコミュニケーション論は、その言語との関連が明瞭に捉えられていないのに対し、内コミュニケーション論は、それが言語へと接続していく道筋が明らかにされている、という点が挙げられる。内コミュニケーションにおける母親は、動物生としての母親ではなく、言語の（自己表出面の）現在の水準の体現者としての、人間的な存在としての母親である。

### 第2節 吉本とフロイトの比較検討

フロイトと吉本には、性の基本的な考え方において大きな相違がある。先に見たように、フロイトは、心的な性としての「リビード」を身体的、生理的な性の過程の心的な代理であると考へた。別の言い方をすれば、フロイトは心的な性を、身体に還元しうるものであるとみなしている。これに対して吉本の観念としての性は、個体ともう一人の個体との間の関係から疎外（表出）される幻想（対幻想）であり、個体に還元しうるものとしては想定されていない。

フロイトが個の身体を基盤に性を考へたのに対し、吉本の考へる性は二者の関係にその基盤を置いている。そしてこの相違が、人間の個体の性の起源を自体性愛的であると見なすか、あるいは母と子の内コミュニケーションにあると見なすか、という差異としてあらわれていると考えられる。

フロイトが、部分的な欲動がまだ全体としてまとめられておらず、自体性愛的に満足させられる状態にあると見なした段階は、吉本においては、母と乳（胎）児の間の性的な内コミュニケーションの段階としての大洋期に対応している。フロイトがこの時期の母親を、乳（胎）児にとって対象の不在、あるいは部分的な対象（自己保存欲動に限定付けされた対象）として

想定したのとは対照的に、吉本は、この時期の母親は、乳（胎）児にとって対象としての全世界であると見なしている。

フロイトが自体性愛に続くナルシズムの時期として想定したものは、吉本のいう「言語の発生機の条件をそなえた時期」（吉本，2004）に対応している。（これは年齢的な一致を意味するものではない）。フロイトがナルシズムを、部分的な自体性愛の「性器の優位のもと」での統一として想定しているのに対して、吉本はそれを、（子の発達に伴う）母親の不在の体験と、その補償としての母親の自己による置き換えによって成立するものであると考えた。フロイトが、性的対象としての母親の本格的な登場を、このナルシズムの相期のあとにくるものであると見なしたのとは対照的に、吉本のいう「言語の発生機の条件をそなえた時期」は、乳（胎）児が母親との「内コミュニケーション」からの離脱へと向かっていく（過渡的な）状態である。そしてフロイト（1914）が、人間は対象愛によってナルシズムが病にまで至ることを免れると述べているのに対応して、吉本は、人間は言葉を獲得することで（言い換えれば、「『概念』を対象として性の備給を成し遂げる」ことで）、精神の異常や病を幾分かの度合いで免れていると述べている。

## 第Ⅵ章 内コミュニケーションの 精神病理論

フロイトがナルシスの神経症を、原始的なナルシズムの段階への退行であると見なしたのに対して、吉本はそれを、内コミュニケーションの段階への退行として捉えた。大洋期への心的な退行と同時に、社会の像もまた、原始共同体の像にまで退化すると見なされている。そして、それにともなって、“作り出された架空の母の像”が、幻聴の音源や妄想の迫害者の原型として登場してくる。この“架空の母の像”は、大洋期における持続的な母の（情緒的）不在を補償するものとして、乳（胎）児が心的に作り

出したものである（吉本，2004）。

大洋期の内コミュニケーションにおいて「母から子への流れが渋滞し、揺動がはげしく拒否的」であるという状態が「長い期間持続」した場合、乳（胎）児は、「（母の感情の流れと相似的に渋滞、揺動し、拒否的）である状態を通過したあとで、）「母からの感情の流れ」を「〈作り出す〉」ようになる。吉本はそう考えた。そして、乳（胎）児が「母からの感情の流れを〈作り出す〉」ことと、「後年になって人が病像として妄想や幻覚を作る」こととが、「無意識の核の質」を媒介として、結び付けられている。ここでは、「病像としての」幻覚と妄想の起源が、胎児期にまで遡行するかたちで位置付けられており、乳（胎）児期に作り出された“架空の母の像”が、幻聴の音源や迫害妄想の迫害者の原型となると考えられている。そして、子が“架空の母の像”を作り出さざるを得ない条件として、長期に渡る母親の拒否的な状態（母の情緒的な不在）が想定されている。吉本は、乳（胎）児期の母と子の間の内コミュニケーションが子の「個性」や「性格」の形成の「第一の要因」となるだけでなく、母と子の「接触の仕方」に「問題がある」ことが「人間が病像を獲得する第一次的要因になっている」ことを、明瞭に述べている。

それでは、大洋期への退行はどうして生じるのか。吉本は、それは病者が「現在の社会的な行動の中での挫折」を「子どもの時の母親との授乳接触の仕方の失敗」と「同一視」してしまうことによって生じる、と述べている（吉本，2001a）。病者は、乳（胎）児期において母との関係の失敗を補償したそのやり方（“架空の母を作り出す”）を、後年の「挫折」体験においても反復しているのだと考えられる。

## 第Ⅶ章 内コミュニケーションの治療論

吉本は、その早期母子関係論に基づいた治療論として、母と子の二世代のカウンセリングという方法を提示している（吉本・田原，1993）。

吉本は、乳（胎）児期における母子関係の障害が、精神の異常や病の第一次的な決定因であると考えており、その時期の母子関係（内コミュニケーション）のあり方や、母親の置かれていた状況や心身の状態（「母の物語」）について、母親自身がスムーズに語れるようになることが、子（患者）が自分自身を了解し、自分自身を越えていく（自分自身についてわかったうえで、「スムーズに心を開いていく」）ための要件になると述べている。

吉本は、臨床家ではなく、ここでは理論的な帰結として治療論が語られている。この方法が実際にどのような効果を持つかを検証することは、臨床心理学の課題であり、これまでに積み上げられてきた臨床心理学的な知見との比較検討や、実践を通じた検証が必要となるものである。

二世代のカウンセリングを通して、母親が乳（胎）児期における子（患者）との関わりや自身の状態を語れるようになることが、子の自己了解（自分の無意識の核のところを自分でわかるようになること）につながっていく、という吉本の治療論は、小此木（2001）が提示した、阿闍世コンプレックス論における治療のモデルと、親近性が高い。阿闍世コンプレックス論と内コミュニケーション論を本格的に対比したうえで、阿闍世コンプレックスという観点から理解された事例を、改めて検討し直していくということが、吉本理論の臨床への応用の道筋を作るために有効であると思われる。

## 第Ⅷ章 結論と課題

本研究の締めくくりとして、三つの結論を提示したい。

一つ目は、フロイトと吉本隆明の早期母子関係論の比較から得られた結論である。これは、フロイトが原始的ナルシズムの段階（自体性愛からナルシズムの相期にかけて）と見なしたものを、吉本は、母と乳（胎）児とのあいだで（前言語的な）内コミュニケーションが行わ

れる時期であるにとらえ直し、その時期を大洋期として明瞭に取り出した（幼児期から区別した）、というものである。フロイトが、胎乳児の母への関心を、無関心および部分的な関心という限定されたものとして想定したのに対し、吉本は、大洋期の乳（胎）児にとって母親（およびその代理）以外には対象となるものは存在せず、母との間の性的な関係の世界が乳（胎）児にとっての全世界である、と見なししている。ここでは、母親が能動的、男性的であり、乳（胎）児は受動的、女性的なものとして母親に応じることになる。個体は、この内コミュニケーションの体験をふまえて発話にまでいたるのであり、子の言語獲得とともに、大洋期は終焉を迎えることになる。

このようなフロイトと吉本のあいだの早期母子関係の捉え方の相違は、精神の異常や病の素因の形成における、早期母子関係の「偶有的な体験」の影響力の評価の違いとしてもあらわれている。フロイトは、この時期の母への関心が限定されていることや、この時期の性が自体性愛的であることを背景に、「偶有的な体験」の影響力を軽く見積もった。それとは対照的に吉本は、母親の実際の心身の状態が、内コミュニケーションをとおして乳（胎）児に転写されると見なし、そこでの（いわば「偶有的な」）関係の障害が、精神の異常や病の、第一次的な決定因となると考えた。

結論の二つ目は、精神病理論に関するものである。これは、フロイトが、（ナルシ症的神経症に含まれる）統合失調症やパラノイアの発症機制を、自体性愛あるいはナルシズムの相期への退行として捉えたのに対して、吉本はそれらを、大洋期への退行として考えた、というものだ。そして、吉本の精神病理論においては、大洋期における母の（情緒的）不在を補償するために、乳（胎）児が作り出した架空の母の像が、幻聴の音源や迫害妄想における追跡者の役割を担うものとして、重視されることになる。また、その治療論においても母親が重視されており、患者の母親が、大洋期における子（患者）



との内コミュニケーションがどのようなものであったかを語れるようになることが、子の治療につながっていくと考えられている。

三つ目の結論は、なぜ、「日本人患者」の臨床においては、「母子関係をめぐる葛藤が中心課題になる」傾向にあるのか、という問いに答えるものだ。これは、日本という国が、(母と子の関係を軸に共同体が展開された)母系優位の共同体の遺風を多く残した地域であるからだ、ということになる。この遺風のひとつとして、出産にまつわる習俗が挙げられる。そこでは、母と子のあいだの内コミュニケーションは習俗(例えば、「終日」続く「添寝の授乳」)によって維持され、強調されると考えられる。子は、母の心身の状態をそのまま転写され、子のうちに巨大な母の像が形成されることになる。

以上が、本研究が提示する、三つの結論である。

本研究は、吉本の精神病理論が、胎児期に起源を持つ母と子の間の内コミュニケーションの存在をその前提に組み入れたものであることを示した。この考え方は、母と子のあいだのつながりを軸に共同体が展開された母系優位の社会の遺風を多く残している、日本という国での臨床実践にとって有用な考え方であると思われる。

## 参考文献

- Freud, S. (1895). Entwurf einer Psychologie. Frankfurt am Main: S. Fischer Verlag GmbH.  
 総田純次(訳)(2010). 心理学草案. フロイト全集3. 岩波書店.
- Freud, S. (1896). Zur Ätiologie der Hysterie. Frankfurt am Main: S. Fischer Verlag GmbH.  
 芝伸太郎(訳)(2010). ヒステリーの病因論のために. フロイト全集3. 岩波書店.
- Freud, S. (1900). Die Traumdeutung. Frankfurt am Main: S. Fischer Verlag GmbH. 新宮一成(訳)(2011). 夢解釈II. フロイト全集5. 岩波書店.
- Freud, S. (1905). Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie. Frankfurt am Main: S. Fischer Verlag GmbH. 渡邊俊之(訳)(2009). 性理論のための3篇. フロイト全集6. 岩波書店.
- Freud, S. (1911). Formulierungen über zwei Prinzipien des psychischen Geschehens. Frankfurt am Main: S. Fischer Verlag GmbH.  
 高田珠樹(訳)(2009). 心的生起の二原理に関する定式. フロイト全集11. 岩波書店.
- Freud, S. (1914). Zur Einführung des Narzißmus. Frankfurt am Main: S. Fischer Verlag GmbH.  
 立木康介(訳)(2010). ナルシズムの導入に向けて. フロイト全集13. 岩波書店.
- Freud, S. (1915). Triebe und Triebchicksale. Frankfurt am Main: S. Fischer Verlag GmbH.  
 新宮一成(訳)(2010). 欲動と欲動運命. フロイト全集14. 岩波書店.
- Freud, S. (1917a). Metapsychologische Ergänzung zur Traumlehre. Frankfurt am Main: S. Fischer Verlag GmbH. 新宮一成(訳)(2010). 夢学説へのメタサイコロジー的補遺. フロイト全集

る。吉本の理論を臨床で応用するための、さらなる模索を続けていきたい。そのための方途のひとつとして、阿闍世コンプレックス論と吉本理論との、本格的な比較研究が考えられる。また、フロイト以後の(主に諸外国における)精神分析学の展開と、吉本理論との対比も必要であると考えられる。これらを今後の課題としたい。

## 〈付 記〉

本研究は、平成29年度東京国際大学大学院臨床心理学研究科修士論文に加筆・修正を行ったものです。

本研究の完成のために、多くの方にご指導、ご協力を賜りました。

妙木浩之先生には、2年にわたり、本研究で取り上げた文献を読む作業に伴走していただき、貴重な御助言、御指導をいただきました。妙木先生の持続的な支えがあってこそ、本研究はなんとか終りまでたどり着くことができました。心からの感謝を申し上げます。

副査の高砂美樹先生には、本研究の完成のための貴重な御指導をいただきました。厚く感謝申し上げます。

14. 岩波書店.
- Freud, S. (1917b). *Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse*. Frankfurt am Main: S. Fischer Verlag GmbH. 高田珠樹・新宮一成・須藤訓任・道旗泰三 (訳) (2012). *精神分析入門講義*. フロイト全集15. 岩波書店.
- Freud, S. (1924). *Der Untergang des Ödipus-komplexes*. Frankfurt am Main: S. Fischer Verlag GmbH. 太寿堂真 (訳) (2007). *エディプスコンプレックスの没落*. フロイト全集18. 岩波書店.
- Freud, S. (1926). *Hemmung, Symptom und Angst*. Frankfurt am Main: S. Fischer Verlag GmbH. 大宮勘一郎・加藤 敏 (訳) (2010). *制止, 症状, 不安*. フロイト全集19. 岩波書店.
- Freud, S. (1933). *Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse*. Frankfurt am Main: S. Fischer Verlag GmbH. 道旗泰三 (訳) (2011). *続・精神分析入門講義*. フロイト全集21. 岩波書店.
- Freud, S. (1938). *Der Mann Moses und die monotheistische Religion*. Frankfurt am Main: S. Fischer Verlag GmbH. 渡辺哲夫 (訳) (2007). *モーセという男と一神教*. フロイト全集22. 岩波書店.
- Freud, S. (1940). *Abriß der Psychoanalyse*. Frankfurt am Main: S. Fischer Verlag GmbH. 津田 均 (訳) (2007). *精神分析概説*. フロイト全集22. 岩波書店.
- 三木成夫 (1997). *ヒトのからだ——生物史的考察*. うぶすな書院.
- 小此木啓吾 (1970). *エロスの人間論*. 講談社.
- 小此木啓吾 (1973). *フロイト その自我の軌跡*. 日本放送出版協会.
- 小此木啓吾 (1989). *フロイト*. 講談社.
- 小此木啓吾 (2001). *阿闍世コンプレックス論の展開*. 小此木啓吾・北山 修 (編) (2001). *阿闍世コンプレックス*. 創元社.
- 小此木啓吾・及川 卓 (1981). *臨床的問題として*のラカン. *現代思想臨時増刊号*, 第九卷第八号. 青土社.
- 太田英伸 (2014). *おなかの赤ちゃんは光を感じるか*. *生物時計とメラノプシン*. 岩波書店.
- Vauclair, J. (2004). *Développement du jeune enfant: motricité, perception, cognition*. Paris: Belin. 明和政子 (監訳)・鈴木光太郎 (訳) (2012). *乳幼児の発達——運動・知覚・認知*. 新曜社.
- Verny, T. & Kelly, J. (1981). *The secret life of the unborn child*. New York: Barbara Lowenstein Literary Agent. 小林 登 (訳) (1987). *胎児は見ている——最新医学が証した神秘の胎内生活*. 祥伝社.
- Verny, T. & Weintraub, P. (2002). *Pre-parenting: Nurturing your child from conception*. 日高陵好 (監訳)・千代美樹 (訳) (2007). *胎児は知っている母親のこころ——子どもにトラウマを与えない妊娠期・出産・子育ての科学*. 日本教文社.
- 吉本隆明 (1982). *改訂新版 共同幻想論*. 角川学芸出版.
- 吉本隆明 (1997). *三木成夫『ヒトのからだ』に感動したこと*. 三木成夫 (著) (1997). *ヒトのからだ——生物史的考察*. うぶすな書院.
- 吉本隆明 (1999). *詩人・評論家・作家のための言語論*. メタローク.
- 吉本隆明 (2001a). *心とは何か 心的現象論入門*. 弓立社.
- 吉本隆明・他 (2001b). *心的現象・歴史・民族*. 吉本隆明が語る戦後55年⑥…政治と文学をめぐって/心的現象・歴史・民族. 三交社.
- 吉本隆明 (2003). *ハイ・イメージ論 I*. 筑摩書房.
- 吉本隆明 (2004). *母型論 (新版)*. 思潮社.
- 吉本隆明 (2008). *心的現象論 本論*. 文化科学高等研究院出版局.
- 吉本隆明 (2013). *改訂新版 心的現象論序説*. 角川学芸出版.
- 吉本隆明・田原克拓 (1993). *時代の病理*. 春秋社.

**Abstract**

**A Comparative Study between Sigmund Freud and Takaaki Yoshimoto about Their Theories of Early Mother-infant Relationships: Through the Intermediation of Keigo Okonogi's Erotic Communication Theory**

Tomoaki Imamura

This study made a comparison in detail of Takaaki Yoshimoto's theory of the early mother-child relationship and psychosis with that of Sigmund Freud for the purpose of exploring the possibility of its application to clinical psychology. In contrasting Yoshimoto's theory with that of Freud, the present paper referred to Keigo Okonogi's erotic communication theory as an intermediary between the two.

Although Freud didn't focus on the mother-child communication in the fetal period and early infancy, Yoshimoto pointed out the importance of pre-verbal communication between mother and child, i.e. "internal communication," and termed the phase "Oceanic period." Okonogi as well emphasized the pre-verbal communication between mother and child in his theory of erotic communication. However, Okonogi never presupposed the internal communication during the fetal stage as suggested by Yoshimoto and assumed the erotic communication only in the period of early infancy.

Key words: Sigmund Freud, Takaaki Yoshimoto, internal communication, oceanic period, Keigo Okonogi, erotic communication